

〔有識者、関係団体等の声〕

<有識者から>

「書くことの価値を捉え、記述力を高める指導を」

北海道教育大学旭川校 学校臨床准教授兼教育学部准教授 山中謙司

(文部科学省国立教育政策研究所 教育課程研究センター研究開発部

学力調査官 教育課程調査官 2014年(4月)～2018年(3月))

中央教育審議会が答申で示した「令和の日本型学校教育」では、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、学力の確実な定着を求めています。とりわけ、協働的な学びや対話的な学びでは、自分の考えを他者に分かりやすく説明することを通して、考えを広げ深めることが期待できます。

全国学力・学習状況調査の結果から明らかになった北海道における特徴的な課題の一つとして、記述式問題での無回答率が全国に比べて高いことが挙げられます。記述式問題では、事実を説明すること、問題を解決するために筋道を立てて考え、その考え方や解決方法を説明すること、論理的に考えを進めてその内容を説明することができるかどうかを問う目的で出題されています。この結果は、協働的な学びや対話的な学びの実現に必要な自分の考えを説明する力、すなわち「記述力」に関する児童生徒の状況を示していると言えます。

記述式問題での無回答率の高さは、「書かない、書こうとしない」といった意志的な側面と「書けない、書き方が分からない」といった能力的な側面が原因として考えられます。意志的な側面に対しては、書くことの価値を捉えられるようにすることが大切です。書くことによって自分の考えを整理してより深く考えることができたり、書いたことを交流することによって他者の考えに触れ、自分の考えをより妥当なものに変容させたりしたことを、学習内容のまとめりと振り返り、自覚できるようにすることが考えられます。また、能力的な側面に対しては、自分の「考え」と考えの根拠となる「事実」、事実から生まれる「解釈」をそれぞれ分けて書き、接続詞や接続助詞でつないで文にするとといった学習活動を日常的に位置付けることなどが考えられます。このようにして記述力を高め、「書ける」状況にすることが大切です。

今後到来する未来予測不可能な時代をよりよく生きるためには、ただ単に知識を記憶する学びにとどまらず、自ら思考し、判断しながら様々な課題に対応することが求められます。GIGA スクール構想により配備された1人1台の端末を活用しながら、自分の考えを可視化し、他者と関わりながら協働的に学ぶことの実現を目指した授業改善を期待しています。

<令和2年度学力向上推進会議委員から>

- 各学校では、学力調査やチャレンジテストの結果を分析し、取組の検証改善を図りながら子どもたちの学びの保障を進めている。
- 令和2年度に道教委が任意で提出を求めた生徒質問紙調査の結果では、中学生の家庭学習の時間が大きく改善されている状況が見られた。臨時休業の影響も大きいと思うが、各学校において、学習の進め方を示すなど、丁寧に対応したことがよかったと感じている。
- 北海道版結果報告書では、小中一貫教育の観点から、小学校から中学校にかけて子どもたちがどう変容したのかを分析するなど、9年間を通じてどのような取組を実施し、どのような成果があったのかなどが示されるとよい。
- 今後も、早寝、早起き、朝ごはんなど、子どもの生活環境の充実に向け協力していきたい。
- 長期の臨時休業では、子どもと保護者が先の見えない状況に追い込まれた。学習面では、何をどのように進めたらよいのか、戸惑いが大きかった。人とのつながりが途切れないようにすることや、学習の進め方を身に付けることが大切と感じた。